

全校朝会 校長講話「3・11を忘れない」

令和3年3月8日
御田小学校 校長

2011年 3月11日 午後2時46分。(フリップ提示)

この日、この時間に起こった出来事…わかりますね。東日本大震災です。あと3日で、10年が経ちます。1, 2, 3年生はまだ生まれていないですね。2分近く揺れが続いた大きな地震が起こり、多くの方の命が失われました。

日本が地震の多い地域にあることは変えることができない事実です。ですから、私たちは、よいことも失敗したことも含め、地震で経験したことや学んだことをこれからの生活に生かしていかななくてはなりません。それを教訓といいます。

東日本大震災は、このように一冊の本にもなっています。(本の表紙の提示)

この震災で亡くなられた方は1万6千人、行方不明の方もまだ2千5百人ほどいらっしゃいます。命を失った一番の原因は津波でした。予想を超える波が押し寄せ、多くの家や人が飲み込まれてしまいました。

(写真を提示しながら説明)

家が流され、全ての財産をなくした人がいます。学校の体育館は、避難した人たちのテントでいっぱいになりました。つらい中で、元気づけられたのは、子供たちの笑顔だったといいます。これは、崩れてしまった家の中から使っていたノートを見つけ喜んでいる小学生です。

こちらの写真を見てください。3月11日、地震が行ったその日に撮った写真です。

(二次避難をしている写真提示) 場所は、岩手県の釜石市です。青いジャージを着ているのが小学生と中学生。中学生が小学生の手をつなぎ、二次避難所である山へ向かって逃げています。

こちらは二次避難所の山に逃げたときの写真です。(二次避難場所の写真提示) このとき、一人の中学生が海の方を見て大きな津波が押し寄せていることに気付きました。その中学生は、とっさに「もっと高いところへ逃げたほうがいい。」と声を上げたそうです。その声をきっかけに、さらに高いところへ向けて避難したそうです。

こうして、波にのまれて多くの命が失われた町がある中、釜石市の小中学校の子供たちのほとんどが助かったといいます。このことは、「釜石の奇跡」と言われ、大きくニュースに取り上げられました。そのときインタビューを受けた子供たちは、「いつもの訓練通りにしただけ」と答えたそうです。

「いつも通り」とは、どのようなことでしょうか。学校の避難訓練で教わっていたことは、次の3つです。

- ・「ここは大丈夫」と思わないこと
- ・周りが逃げていなくても津波がくると思ったら声をあげながら真っ先に逃げる
- ・できるだけ高いところに避難すること

もう一度、この写真を見てください。(二次避難をしている写真提示) 避難をしている子供の周りに大人の人たちがいます。逃げている子供たちの姿を見て、町の人たちは「これは大変なことが起こるかもしれない。」と避難を始めたといいます。後から話を聞くと、「ここまで津波はこないだろうと思っていた。」「子供たちの姿を見なかったら逃げていなかった。」という人もいたそうです。実は、今映っているこの場所も、津波の被害を受けています。つまり、避難訓練を真剣に行っていた子供たちの行動が、町の人たちの命を作ったともいえます。

3月、御田小学校では、予告なしの避難訓練を行います。この訓練の繰り返しが、本当に地震が起こったときの冷静な行動につながります。またか…と思わず、真剣に行いましょう。

今、震災を体験した私がみんなに語り継いでいるように、このとき5年生だった小学生が中学生になったとき、東日本大震災で体験したことを語り継いでいました。変わりに読み上げます。

ここに生きていることは奇跡です。震災を経験して、ふとしたことで生きていたよかったですと感じます。家の玄関を開けた瞬間、「おかえり」という声が聞こえてくるだけで、部屋でスイッチをいれたとき、電気が点くことだけで…。普段なにげなく過ごしている一日は、誰にとっても貴重な一日で、そのときそのときを大切に生きることが、一番重要なんだということをたくさんの人に伝えたいです。

今の学級で過ごすのみあと10日余りとなりました。貴重な一日一日を丁寧に過ごしていきましょう。